

【6】 小学校のはじまり～学制と徳島の教育～

1 生徒用資料解説

①明治期の小学校・寺島校：徳島県教育委員会編『徳島県の歴史読本 平成17年版』
2005年3月，p.102

「1872年（明治5）に公布された「学制」によって，徳島では出来島に一番小学校（旧西校），寺島に二番小学校（旧南校），助任に三番小学校（旧北校）が名称も新たに設立された。そのころの名東県（阿波・淡路・讃岐を含む）には，公立31，私立439の小学校が誕生し，教育をうけなければならない年齢に達した児童の約30％がそこで学ぶようになった。やがて，師範学校・中学校・女学校の創立もあいつぎ，また児童の就学率もしだいに高まり，明治の末には96％に達した。」

②名東県で発行された教科書：三好昭一郎・大和武生編『徳島県の教育史』思文閣出版，1983年7月，p.218，一部改変

「当時の教科書を見ると，（注・『小学読本』巻一冒頭には）『凡そ世界（地球上？）の人類は五つに分れたり。亜細亜人種，欧羅巴人種，亜米利加人種，亜非利加人種，馬來人種，日本人は亜細亜人種のうちなり・・・』とある。私はこれに対して幼な心にはじめて妙な感にうたれた。即ち世の中に人間は皆同じと思うていた（尤も西洋人は父母から唐人として教えられたけれども）のに，かくの如く五つの人種があるとは初めて知った」（鳥居龍藏『ある老学徒の手記』所収）というような，一種のはげしい好奇心を誘い，異質なものにふれさせようとしたのも，学制当初の小学校教育内容の一面をよく表現している。」

③明治初年の教授法：徳島市教育委員会編『徳島市教育史』教育出版センター，1974年3月，資料集 p.1（関連）板倉聖宣「小学校の誕生」『週間朝日百科 94 日本の歴史（近代Ⅰ） 学校と試験』p.10-104

「この「問答」を中心とした授業は，そのために作成された掛図や『小学読本』がアメリカのものを直訳したもので，難解極まるものが少なくなかった。たとえば，一年後期から二年前期で教える「色図」の授業では，四十種もの色の名前や色の合成分解まで教えるようになっていた。読本だって，英語では易しい文章をそのまま直訳して日本文としたために，やたら難しい文章から教えた。（中略）掛図や実物による問答法の授業は，欧米でも進歩的な教育思想の流れをくんだものであったことは間違いない。しかし，その内容を日本の言葉や事物に合わせて編成しなおさなければ，その教育は伝統的な寺子屋教育よりも遙かに劣るものでしかなかったことは明らかであろう。」

④名東県の小学校就学状況：三好昭一郎・大和武生編，前掲書，p.216

「明治六年度に三十一校であった小学校は，同八年度には四一六校に急速な増加を見ている。当時における名東県の小学校就学状況は，学齢就学率についてみると明治6年が32.4

%, 明治7年が 29.3 %, 明治8年が 29.9 %である。さて, 新設校の校舎は, 民家使用が二〇〇校, 寺院借用が七十八校, 神社が十六校で, 新築はわずか三校のみであった。そこに当時の小学校設立の行財政上の特色がよく表現されている」(斜体字部分は, 統計にもとづき改変した)

2 発展的に扱える資料

○制度としての学校が持つ国民形成の機能について考察したもの

桜井哲夫『「近代」の意味－制度としての学校・工場－』NHKブックス, 1984年

○日本近代化の過程(社会変動)と学校や試験の機能との関わりを論じたもの

竹内洋『立身出世主義』NHKライブラリー, 1997年

○大阪府等を事例に, 明治の小学校教育の制度や教員養成制度について考察したもの

大森久治『明治の小学校－学制から小学校令までの地方教育』泰流社, 1973年

○日本の学校教育制度の変遷を概観したもの

文部省編『学制百年史』帝国地方行政学会, 1972年

3 参考文献

1. 徳島県教育委員会編『徳島県教育八十年史』1955年3月

2. 徳島県退職婦人校長会編『徳島県教育女性史』1989年3月

3. 徳島市史編さん室編『徳島市史 第四巻 教育編・文化編』徳島市教育委員会, 1993年10月

4. 石躍胤央・北條芳隆・大石雅章・高橋啓・生駒佳也著『徳島県の歴史』山川出版社, 2007年6月

5. 久保義三・米田俊彦・駒込武・児美川孝一郎編『現代教育史事典』東京書籍, 2001年12月

4 板書計画

小学校のはじまり～学制と徳島の教育～

○比べてみよう

江戸時代の寺子屋の様子

明治初年の小学校の授業の様子

- ・ 明治の小学校では、掛け図を使った問答中心の授業が行われた。
- ・ 全員が同じ科目を学ぶ。等

学習課題 1 明治に入り、なぜ小学校の教育が必要と考えられたのだろうか。

- ・ 学問は、国民が身を立てるための資本（立身・産業教育）
- ・ 国民すべてに必要なとされる教育（国民教育）
- ・ 子供（子弟）の教育は、保護者（父兄）の義務（義務教育）

学習問題 2 徳島では、小学校教育はどのように始まったのだろうか。

- ・ 1873（明治6）年、一番小学校・二番小学校・三番小学校が設立
- ・ はじめは、男女とも10歳から入学
- ・ 就学率は、約32%→必ずしも高いとは言えない。

学習問題 3 国民の義務としての教育を定めたのに、なぜ就学率は高くなかったのだろうか。

- ・ 校舎の建設や教員の雇用→町や村の負担
 - ・ 親の授業料負担
 - ・ 「子どもは働き手」という考え方
- ⇒学校教育の意義が、国民に十分に広がらなかった。

学習問題 4 当時の徳島の人たちに、学校がないと困る理由を自分の言葉で主張してみなさい。

主張 A

主張 B

主張 C

主張 D

5 授業の目標

(社会的事象への関心・意欲・態度)

○学校の存在理由について、自分なりの意見を持って積極的に発言しようとする。

(社会的な思考・判断・表現)

○学習した内容や具体的な資料に基づいて、明治新国家の建設という観点から、学校の存在意義について考え説明できる。

○学校の存在意義について自分の意見を表現し、相手の意見も聞きながらクラスで議論することができる。

(資料活用の技能)

○明治はじめの小学校教育の状況や学校の存在意義を説明するために、教科書の資料や自分が調べてきた資料を活用できる。

(社会的事象についての知識・理解)

○学制の理念となっている小学校教育の意義について理解し説明できる。

○明治のはじめ、学校教育の意義が国民に十分に広がらなかった理由を、時代の特色とむすびつけながら理解し説明できる。

6 授業展開例

－ 2 単位時間配当の小単元構成の場合 －

	学習活動	指導上の留意点
導入	江戸時代の寺子屋の様子と明治はじめの徳島の小学校での授業の様子(図版「明治初年の教授法」を活用)とを比べ、小学校の授業の特徴について、気づいたことをワークシート(問題1)に書き込む。その内容をクラスで発表し合う。	○江戸時代の寺子屋の様子については、教科書や図説資料集に掲載されている図版を活用する。
展開	【パート1】 テキストブック掲載の資料「学事奨励に関する仰せ出され書」(一部要約)を読み、その記述から、明治政府による学制にもとづく小学校教育のねらいを読み取り、ワークシート(問題2)に書き込む。 ワークシートに書いた内容をクラスで発表し合う。	○資料「学事奨励に関する仰せ出され書」(一部要約)について、文中の難解な用語は、教員が適宜解説する。

<p>【パート2】</p> <p>テキストブック掲載の資料（写真資料「二番小学校（寺島校）」、写真資料「名東県発行の小学校教科書」）を参考にしながら、徳島ではじまった小学校教育の実情について、テキストブックの本文記述（徳島ではじまった小学校）をもとに、ワークシート（問題3）にまとめる。</p> <p>小学校で教えられた科目や授業の方法について理解する。</p>	<p>○小学校で教えられた科目や授業の方法については、具体例を挙げながら、生徒がイメージ豊かに理解できるように工夫する。</p>
<p>【パート3】</p> <p>小学校教育のはじまりのころ、全国的にも、徳島においても就学率が低かったことを統計資料「名東県の小学校就学率」や補足資料（就学率に関する全国統計）から読み取り理解する。</p> <p>その理由を、行政や保護者の立場、あるいは当時の「子ども観」を観点に、テキストブックの本文記述（学制が徳島の人々に与えた影響）をもとに、ワークシート（問題4）にまとめ、クラスで発表し合う。</p>	<p>○就学率が低かった理由を、生徒が具体的なイメージをもって考えることができるように、補足資料（小学校の建設費、教員の給料、授業料、「子ども観」等に関する資料）を準備し活用させる。</p>
<p>【パート4：発展学習】</p> <p>グループに分かれ、「当時の徳島の人たちに向けた、学校がないと困る理由についての主張」を自分の言葉で作る。グループの主張をワークシート（問題5）にまとめ、クラスで発表し合う。</p>	<p>○パート4は発展学習である。この学習を展開する場合は、パート1～3を1単位時間（50分）とし、パート4及び終結部の学習活動に1単位時間を配当するようにする。</p>
<p>結論</p> <p>パート4で出し合った主張をふまえながら、学校教育の意義について政府（国家）の立場と国民（個人）の立場に分けて整理してみる。</p>	